

全講座を終えて

参加者インタビュー



前村 春樹さん

高校2年生
プラスチック回ほかに参加

受け身であることを望んでない

オンライン講座に参加する前、中学2年生の夏休みに、鹿児島県テングダーさんのラボで3日間ワークショップ・プラスチックの研修を受けました。学校の自由研究でプラスチックの再利用に取り組みようと思ったからです。ペットボトルキャップからアクセサリを作ったりして1日めが終わる頃、テングダーさんから、「もしイヤイヤやってるんだら、帰ってくださ」と言われました。衝撃的な一言でした。その時の僕の態度はかなり受け身だったと思います。学校の授業では、受け身で聞くだけで、自分から積極的に動くということをやってきませんでした。ラボでも、授業を受けるような感覚でした。そしたらガツンと言われました……。

一緒に来ていた母と、「続けるか、やめて帰るか」という話しをしました。その時に「テングダーさんは、僕が受け身であることを望んでないんだ」と気づいたんです。「せっかくここまで来たんだし、最後の2日間はう」と考えを立てなおし、残りの2日間ほ

意識して積極的に取り組むようにしました。最終日は廃プラスチックを溶かしてお皿を作ったんですが、なかなか上手くいかず、何度もトライしました。最後に船穂のいくお皿ができた時はすごく達成感があった。初めてものづくりの楽しさを味わいました。ラボでの経験を踏まえてまとめた自由研究のレポートは、学校で優秀賞をもらいました。

あの時のテングダーさんのことばは、自分の一番悪いところを突いていただけたと思います。テングダーさんと過ごした3日間は、それまでの人生でいちばん自主性を求められた時間でした。それ以来「やるんだ」と積極的にやったらほうが、相手も自分も気持ちがいいと考えるようになりました。

ワークショップの講師になる

オンライン講座でも、プラスチックの回などに参加しました。そして、高校2年生の冬に、縁があって、地域のイベントで「ペットボトルキャップからアクセサリ」を作るワークショップをすることになりました。ラボでの研修と講座で学んだことを参考にしながらワークショップを組み立てました。



ラボでの研修と講座で学んだことを参考にしながらワークショップを組み立てました。人に教える経験が初めてだったので、参加者にとってどういうふうに行

えたらわかりやすいだろうかとか、いろいろ考えながらやって、終わったときにはクタクタでした。

ワークショップをやったことで、自分自身もプラスチックの扱い方や道具の使い方がコツがわかるようになりました。ニッパーの使い方が上達して、ペットボトルキャップを刻んでペレットにする作業が以前の半分の時間でできるようになりました。アクセサリをつくるのにどのくらいの量のペレットをどんなふうにつぎのなかに盛ると仕上がりがきれいになるかわかったり、来年もワークショップをやらないうと声をかけてもらったので、またやろうと思っています。



前村 晶子さん

春樹さん母
プラスチック回ほかに参加

投げ出さずに取り組んで得た自信

ラボでのテングダーさんのことばは、「親に言われて来たのだからやらなったら帰れば」と言われていた受けとめられた。ああいうことをさきとって言うってくれる人はいない私にとっても強烈な体験でした。最後まで投げ出さずに、廃プラからものを作るこ

とに取り組むと、最後は春樹なりにいいものができてうれしかったと思います。



地域でのワークショップでは、事前にホールで開かれたイベントで大盛況のための発表もありませんでした。ペットボトルのキャップを細かく砕く、大変なと声をかけられることも多かったです。その度に春樹は、「これはアクセサリで公開されている設計図をもとに」破砕機も自作しています。最終的には、「アクセサリに緑色を入れないからなおした」というお客さんがいて、私だったら時間がなくの断るところを、春樹は「こつ」やったら線が入りますよ」と対応していました。いろんな経験をして自信につながったんじゃないかな。来年のワークショップも声をかけてもらったので、地域でワークショップが広がっていくといいと思っています。

*プラスチックを再利用することで環境への負荷を軽減しようという考えで始まったオープンラボプロジェクトで、世界的な広がりを見せています。テングダーさんは日本版の「Reinforce Right Japan」を運営している。公開されている設計図をもとにワークショップを破砕・射出成形するための機材一式を自作して使っています。



宮崎 高康さん
松蔭中学校 Global Stream・美術科教員
火起こし回ほかに参加

目の前の人をやつとみせることのすばらしさ

勤務校のグローバルコースで、身体や五感を使う活動を担当しており、その一つとして火起こしに取り組んでいます。グローバルコースでは英語と論理的思考・表現を重視し、探究やプロジェクト学習、プレゼン、ディベート、ICTなどを積極的に取り入れています。生徒たちは授業を通してさまざまな表現のスキルを獲得していきます。一方で、年齢的なこともあって、自分が一本当に思っている、「伝えたいこと」を表現することができず、恥ずかしくなったりします。さまざまなスキルの習得と同時に、表現したいという思いを動かすためのセッションとか感性とか感情を耕す経験が重要なんじゃないか。火起こしを含めて身体や五感を使う活動に取り組む始めた際には、教員側のそういう課題意識がありました。

ちょうどその頃、この講座のことを知り、火起こしの回に参加しました。この講座に出会っていかつたら、インターネット上の動画や記事からの情報をもとに火起こしの活動をしたいと思いましたが、テンドーさんから学んで取り組むとは違うものになっていだろうと思えます。例えば、テンドーさんは「なぜ今そうなっているの？」と今何が足りないから火は起さなないの？」とたくさん問いを投げかけます。「今火を起すのに必要なものは何か」を探りながら火を起す経験を、ただ漫然と繰り返すの

ではなく、考えながらトライ&エラーをする。この大事が強く意識に残りました。生徒と火起こしをするときも、集中力の加減を見ながらではありませんが、問いを投げかけるように心がけています。

さらに、画面越しとは違い、テンドーさんが火を起さずを目的にしたりしたのとはとても重要な経験でした。筋骨隆々の、圧倒的自分とは違う体格の持ち主ではなく、すらすらとしたテンドーさんが自分の目の前でリアルタイムで火を起こした。習得するまで何カ月も練習したとおっしゃっていました。が、それでも、目の前で火を起こすテンドーさんを見て、自分も練習すればできんだと思えたのです。実際、私自身も練習を兼ねて、60秒で火を起こせるようになりました。目の前にいる人がやつとみせるののすばらしさ、リアリティの持つ力を強く認識しました。学校でも、まず私みんなの前で火を起こします。そうすると、「うわー」と拍手喝采が起きて、「目の前にいる同じ人間が火を起こせるんだから自分にもできる。起こしたい」と思ってもらっているんじゃないかと思えます。

グローバルコースの生徒たちは、毎年火起こしに取り組んでいます。前回ここがう



まく、いかなかたから今回はこうしよう、と経験を踏まえて工夫している様子が見受けられます。最初は火を怖がる子も多いのですが、だんだん慣れてきます。この辺まで近づいても大丈夫と、体験からつかんでいるようにもです。今の生徒たちは、授業もフライトも、多くの時間をスマホやタブレットのディスプレイを見て過ごしています。私の担当する美術でもタブレットで絵を描くようになりました。けれど、世界にふれるのがディスプレイを通過しばかりだと、その世界は電気が止まったら全部ストップしてしまいます。ディスプレイを介さない世界も大事にしてあげたい。これからは、生徒と実体験を通してトライ&エラーを積み重ねていきたいと思います。



島田 晶子さん
小学教員
システム思考回ほかに参加

3・11を経て授業の目的が変わった

東日本大震災を経験して、自分たちが生きていく社会が成り立っている仕組みが、暮らしを揺るがしているエネルギーのことについて、あまりにも無自覚で、聞こうとせず、に口々生きていくというのを思い知らされました。自分自身の生活はもちろんですが、授業でもこの課題を正面からとらえていかなければならぬと痛感したので

す。そこいらいんな教材を通じて、子どもたちとエネルギーについて体験的に学び、自分たちの生活を見直し、自然のエネルギーをもとに何か方法を考えてるような授業に組み替えていきました。

ちょうどその頃、なままたテレで「ママダーの思い」というキネマタリー番組を見たんです。テレビに映し出されたテンドーさんは、山の中で家族とオフグリッド生活をしています。世の中のいろんな矛盾、目を背けて隠遁生活をしているんじゃないかと、「自分たちがこんなダメにした世界でどう生きなければいいのか」を探った結果そこに生きていくのが伝わって、私も、しかも、悲壮感もなく楽しそう！ こんな人がいるのかと聞きたくうれしくて、「いつか直に会って話を聞きたい」と思いました。

そんな経緯があつて、2019年秋にTJFが東京で開催したテンドーさんのワークショップに参加しました。その後一緒に参加した先生たちと、学校の研修プログラムでテンドーさんのラポを助ける計画も立てていたのですが、コロナで頓挫してしまつて、忸怩(しくじ)たる思いをして、たときに始まったのがこのオンライン講座でした。

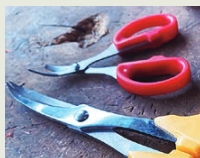
自分の道具を作り替える

オンライン講座には数回参加しました。すごく感動したのは、アルミ缶を使ったコト作りで、自分のハサミを加工したことで、アルミ缶の底を丸く切り抜く作業があるのですが、普通の直線用



のハサミではともし切れない。そこで、画面越しにテンドーさんのやり方を見ながらハサミを

バーナーで熱して刃先を曲げ、丸く切り抜くための道具に作り替えるという経験をしたんです。目的に合った道具を自分で作るという発想は、それまでの自分でありませんでした。衣食住に必要なものをなるべく自分で作り出すとはしてはいたものの、道具は、専門家が作った物を買って使うのが当たり前になっていました。この経験は、私にとっては大きな転換点で、「やっぱり自分が実践しないとだめだ。知っているつもりになって授業するのは、子どもたちに責任を押しつけて、自分では引き受けてない」と感じるようになってきました。



「問題が通じ」人ほど美しく怒る。

講座を通して私がいかに感じ入ったのは、テングーさんは「これはおもしろいよね」「問題だね」と思ったことに体ごと入っていて、そして実際につり合わせようとしていくということでした。しかも、ものづくりに興味、その探究心の純粋さ。そこまでしないと、リアリティにはたどり着かないかもしれないと思います。2022年夏にテングーさんとの研修が実現したときのことなのですが、テングーさんとその問題から遠い人ほど、美しく怒る」ということをおっしゃったんです。自分は問題の当事者にはならず、離れたところから涙をかがぶらずに「問題だ、問題だ」と言い、講座に出ていると、まさしくそのことが自分に突きつけられているような気がしました。教員として、気をつけたいと、まるで自分がいかにわかっていけるのよって、体裁のいこうとを「どうあるべき」と子どもたちに教える

まうところがあります。でも、そうやって口で言うてる人が、実はわかってなかったり、実際にはできなかつたりもする。教員自身身体をくぐらせる体験をして、試行錯誤することの重要性。そこをいっ問われている感じがしています。体調が悪いときは講座に出なくなつたです(笑)。

6年生向けの「家出講座」

自分が講座を受けるだけでなく、2023年1月には、当時の勤務校の桐朋小学校にテングーさんをお呼びして、6年生向けに「ローワーク」の授業をやっていたきました。その名も「家出講座」。草を編(なつて)縄を作り、校庭の木にロープを結んでタープ・フルシートを張り、その中に入って過ごしてみる。自分の手・草からロープを作り、ローワークを身に付けて屋根や壁を作ることができれば、風を防ぎ、暖かい空間をつくって身体を守ることができるといって授業した。



桐朋小学校提供

子どもたちは、「自分の役に立つものの必要ものを、自分で作れる」という発見に喜びを感じているよでした。家族でキャンプをするときは専用の道具を使つてたこと、意外にも、バグは木の棒で、ひもは自分たちが脚つた縄で、タープはフルシートでできた。うれしかった、という子どももいました。専用の道具を買わなくても、身近なもの

使つて自分たちの役に立つものを自分で作り出せる。そこに気づいてたのはすごいと思います。

当日は風がとて強く、ブルーシートを張るのもなかなかうまくいきませんでした。けれど、ブルーシートを張るだけでなく暖かいんだとか、風根のくぐってこんな大事なんだとか、屋根の角度が大事なんだとか、自分たちが草を編つて作ったロープがどれだけ実用性のあるもんだつたのかとか。子どもたちの感想を読み返すと、そういうことを身をもって経験したことが伝わってきます。

「問いをもつて生きる」を学ぶ

テングーさんに学校での授業をお願いする意味の一つは、ものの見方が変わるということだと思います。「世界との向き合い方が自分と周りの大人とまったく違う人に出会うことで、自分のものの見方が揺さぶられて、世界の見方が変わつていく、テングーさんは、衣食住のあり方、エネルギーのことなど、「これでいいの?」「これの先やっていくの?」と問いかけます。私たちも「今あるものを疑う」という学びを重視して、「現代社会の課題を知りその背景を探る」取り組みを行ってきました。ただ、その先の実践をどうするかというところはなかなか難しいのが現状です。テングーさんは現代社会の課題を背負いながら、解決に向かって具体的な実践を続けている。「問いをもつて、(つひ)とを生きても」と言つたらいいんじゃないか。そういうあり方になれると、学びはともおもしろくなる、深くなる。これからの生き様を考えることにもつながると思います。

ただ、そういう学びが成立するには、前後の学びがしっかりと組織されている必要があるとも思います。子どもはびびりすぎるほどいろいろなことを覚えているので、一度の出会いでその後の人生が変わることもあり



桐朋小学校提供

ます。けれど、前後の学びと連動されていないと、「問い体験できたな」だけで終わってしまうことが多い。その子自身の生活とそれまでの体験と結び付けたり、発展的な学びにつなげていくことで、ものの見方が変わっていくのだと思います。責任をもつ系統立てた学びを組織する教員がそこにいる必要があると考えています。できごととならテングーさんが何カ月かごとに来られるのが理想です(注)。(注)1

*1 2015年桐朋島子七製作、第24回F.N.S.P. キンダリール賞受賞者受賞作品
*2 2019年11月実施、教育しが異なる時代に「<https://www.wjtf.or.jp/information/61a/>」
*3 実際の家出講座では、タープを張るの十分な長さの縄を揃う時間がなかったため市販のものを使用

「注」1

2024年2月、桐朋小学校でのテングーさんの講座より2弾して、火起こしの授業が実現しました(注)1。講師派遣の部分お手伝いさせていただきました(注)2。その後、授業に参加した子どもは保護者、先生の有志で、桐朋島のテングーさんの子どもで合宿する自主企画も進んでいます。